台大日本語文研究第 19 期
2010 年 6 月，頁 141-172
2010-06-21 收稿，2010-07-20 通過刊登

《哲學字彙》初版與明治時期之邏輯學用語
—以一字詞、二字詞為中心—

金原泰介*

摘要

《哲學字彙》是明治時代日本首次出版的哲學用語集。《哲學字彙》對於近代日本的學術用語及翻譯有很大的貢獻。因此關於該書的影響力，有些學者進行研究，並獲得重要研究成果。

在明治時代，《哲學字彙》受到廣大的重視，很多學者採用該書的學術用語。因此，研究《哲學字彙》之影響時，明治時代的學術著作是不可缺少的資料。但是，現有的相關文獻主要是以辭典爲材料，以筆者管見並沒有以明治時代的專書爲中心來探討《哲學字彙》對學術用語的影響之研究。有鑑於此，本論以明治時期重要邏輯學者的著作爲材料，取出傳統邏輯學的基本用語並限定一字詞與二字詞爲主題來考察《哲學字彙》初版對明治與現代的學術用語之影響。

研究《哲學字彙》初版之影響時，明治時代的學者—西周，其譯語極爲重要。由文獻可知《哲學字彙》中採用了不少西周的譯語。本論指出：許多重要的學者採用此類邏輯學基本用語的譯語，而這些譯語亦被延用至今。

關鍵詞：哲學字彙、西周、明治時期之邏輯學用語、明治時期之譯語

* 開南大學應用日語學系助理教授

Tetsugaku jii's terminological influence on basic terms of logic in the Meiji era

Kimbara, Taisuke*

Abstract

Tetsugaku jii (哲学字彙) is a philosophical glossary that was first pubilished in japan in the Meiji era. This book have influence on the formation of philosophical terminology, therefore, Prior studies have been made on the influence of this book. In the Meiji era, *Tetsugaku jii* is very influential, and many scholars used terminology from this book. Thus, to study the influence , we must draw attention to research the academic work of the Meiji era. However, little attention has been given to this point. The purpose of this paper is to consider the influence of *Tetsugaku jii* 1st edition on contemporary important scholars, especially on their one and two character terminology of traditional logic.

In this paper, the author found that important fact is terminology translated by Nishi Amane (西周) . Nishi is a famous philosopher in the Meiji era. Prior studies already reported that *Tetsugaku jii* adapted a lot of terminology tranlated by Nishi. the author demonstrate that this book's terminology from Nishi tend be adapted by many important logicians in the Meiji era, and be established as basic terms of logic.

Keywords: *Tetsugaku jii*, Nishi Amane, basic terms of logic in the Meiji era, translation in the Meiji era

* Assistant Professor of Department of Applied Japanese, Kainan University

『哲学字彙』初版と明治期論理学用語
―一字漢語・二字漢語を中心に―

金原泰介*

要旨

『哲学字彙』は、明治時代に日本で最初に出版された哲学用語集である。その近代日本における学術用語・訳語の成立への貢献は大きく、それゆえ、該書の影響力については既にいくつかの重要な先行研究が発表されている。

明治において『哲学字彙』は大きな影響力をもち、その用語は広く用いられたという。であれば、該書の影響力を考える上で、明治の学術著作は不可欠の資料と言える。しかし、先行研究は主に後世の辞書・辞典を資料としており、明治の著作を中心として『哲学字彙』の学術用語への影響が論じられることは、皆無に等しい。この現状を鑑みて、本稿では、明治の論理学著作を材料とし、伝統論理学の基本用語―特に一字漢語・二字漢語―を取り上げ、明治と現代の学術用語への影響の実態について考察した。

初版の影響力を考える上で注目されるのは、明治の学者である西周の訳語である。先行研究において既に初版が西周の訳語を少なからず採用していることが指摘されている。本稿は、このようなタイプにおける基本用語の訳語が多くの主要論理学者に採用され、明治の早期に訳語として定着し、そのまま現在まで使用される傾向があることを指摘した。

キーワード：哲学字彙、西周、明治の論理学用語、明治の訳語

* 開南大学応用日本語学科助理教授

『哲学字彙』初版と明治期論理学用語
―一字漢語・二字漢語を中心に―

金原泰介

一、はじめに

井上哲次郎等による『哲学字彙』は、欧米の哲学用語に訳語を付したもので、明治に刊行された日本で初めての哲学用語集である。明治 14 年（1881）に初版が出版され、同 17 年（1884）に二版、同 45 年（1912）に三版が出版された。該書については、既に少なからぬ研究論文が発表されている。

従来の『哲学字彙』研究においては、その明治期や後世への影響の実態が研究テーマの一つであり、既にいくつかの重要な成果が発表されている。例えば、永嶋大典・森岡健二は、該書が明治期の英語辞書中の訳語に影響を与えていることを指摘している[1]。高田真子は、外国語辞書や小説、教育基本語彙などを資料として、『哲学字彙』所収の学術用語の一般化の様相などについて、計量語彙論の手法を利用して調査した[2]。

また、『哲学字彙』の学術用語への影響力については朱京偉が詳細に論じている[3]。朱は『哲学字彙』初版の用語と明治初期の学者である西周の訳語について、明治から昭和にかけての哲学辞典がどれほど両者の語彙を収録しているかを精査し、近代の哲学用語の成立過程を明らかにしようとした。朱によれば、哲学における主要語 881 語のうち、初版に関連する用語は 423 語あるという[4]。すなわち、近

---

1 永嶋（1996）序論・第五章「『哲学字彙』」、および森岡（1991）第十六章第三節第七項「『哲学字彙』」。

2 高田真子の研究の内容については、高田（2002）第八章「結論」に簡潔に述べられている。

3 朱（2002）。

4 朱（2002）の第三節「哲学用語の抽出と分類」、および表五と表十五を参照。423 という数字は、各表における「西周／字彙」「字彙」「西／字」「字」の項目の数を合計したもの。なお、423 語には、大正以後に哲学辞典に収録されるようになった用語も含む。

代の哲学基本用語における初版の用語の比率は約 48 パーセントであり、その影響力の大きさは明白である。

先行研究により、『哲学字彙』の影響力の実態は明らかになりつつあるが、従来十分に論じられていない論点も存在する。

一つは『哲学字彙』の同時代の哲学用語への影響力についてである。朱京偉によれば、該書と西周の用語は「明治時代全般において強い影響力を持っていた」[5]という。また、『哲学字彙』の訳語は、明治前期に既に「この書大いに弘行し其訳語の如き近来著訳者の採依引用する処となりたり」[6]というほど利用されたという。であれば、『哲学字彙』の影響力を考える際には、明治の哲学者が実際にどの程度『哲学字彙』を利用したか、という点にも注目する必要があると考える。

明治期における影響力を考察するにあたり、重要な資料となるのは、当時の学者が遺した著作・訳書・論文などである。朱京偉は特に単行本の著訳書について、「最も基本となる資料群」[7]と位置づけ、調査の重要性を指摘する。しかし前述のように氏は朱（2002）においては哲学辞典のみを調査対象としており、哲学書を資料として調査は行っていない[8]。明治期の学術著作を資料とした、『哲学字彙』の影響についての研究は、現在のところ、未開拓の分野と言えよう。

また、『哲学字彙』収録の訳語と現代の哲学用語との関連性についても、考察すべき点がある。

『哲学字彙』について、該書の訳語と現代の哲学用語との共通性が指摘されることはある[9]。しかし、それが明治期学術著作の用語との関連とともに詳論されることは、管見では皆無に等しい。前述のように、哲学における主要語 881 語のうち、『哲学字彙』初版に関連する用語は 423 語ある。その 423 語中、明治期における初出語は 371

---

5 朱（2002）P.122。
6 作者不詳（1888）P.116。1888 年は、明治 21 年に当たる。
7 朱（2002）P.97。
8 朱（2005）は哲学・論理学用語の初出を調べるためにこの時期の著作を調査しているが、『哲学字彙』の同時代への影響という点については論及がない。
9 例えば、森岡（2007）。

語である[10]。このことは、明治期には現代と共通する訳語が既に相当数定着していたことや、また、そうした状況と『哲学字彙』とが密接に関わっていたことを示している。『哲学字彙』の明治期哲学用語への影響について、現代用語との共通性の観点から考察し、その実態を明らかにすることは、重要である。

以下、本稿では従来看過されている如上の問題について、明治の学者の著作から資料を収集し一考察を試みたい。

とはいえ、明治時代の哲学著作を対象とした膨大な量の資料収集と分析は、本稿のような小論の為しうることではない。本稿では、調査対象となる資料の分野と学者を限定し、さらに調査の対象語彙を一字漢語・二字漢語に限定して（その理由は後述する）、その範囲での卑見を提示することとしたい。

二、資料の調査範囲について

（一）調査対象となる『哲学字彙』の版本

前述のように『哲学字彙』は、初版、二版、三版が出版されている。本稿では特に初版の影響力について調査する。その理由としては、初版には索引[11]や電子テキスト[12]があり、語彙の調査に便利であること、また、既に朱京偉が指摘しているように[13]、二版で増補された訳語の現代語への影響力が限られていること、三版は明治の末期に出版され、明治期における影響力という点では調査の対象外としてよいこと、などが挙げられる。

なお、本稿では『哲学字彙』初版の底本として、国会図書館所蔵本を用いた[14]。また、初版の語彙の調査には、大阪大学の岡島教授

---

[10] 朱（2002）表五を参照。表五における明治期哲学事典の「西周/字彙」「字彙」「西／字」「字」の項目の数を合計した。

[11] 飛田（1979）。ただし、近年、二版についても飛田他（2005）が出版された。

[12] 大阪大学の岡島昭浩教授が、『哲学字彙』初版のテキストを公開している。次の URL を参照。（http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/kango/tetugaku.txt）ただし上記のテキストには少数であるが誤字もあり、利用の際には校正を要する。

[13] 朱（2002）PP.101-102。

[14] 国会図書館所蔵本は、インターネット上の近代デジタルライブラリーで公開

が公開している、前述の電子テキストを利用した[15]。

（二）調査分野

では具体的にどのような分野を調査対象として選ぶのかといえば、本稿では、伝統論理学の基本用語を対象とする。伝統論理学を選ぶのは次の理由からである。

一つは、調査対象を単に哲学とした場合、その調査範囲が広すぎるからである。船山信一によると[16]、明治期の哲学は初期にはイギリス・フランスの哲学を輸入し、後にドイツの哲学が入ってきたという。輸入された哲学は実証主義・観念論・論理学・プラグマティズムなど多様である。その多様な分野における基本用語を全て調査するのは困難である。他方、伝統論理学は哲学よりも限定された分野であるために調査しやすいという利点がある。

また、伝統論理学については、文部省（1965）が発行され、学術用語の統一化が図られており、現代の訳語と明治の訳語との比較が容易である[17]。

（三）調査対象とする学者

本稿では、明治論理学史における代表的な論理学者が用いた術語に注目する。一般的に考えて、学術史的に重要な学者は、しばしば後世に学術的影響力をも有する。その影響力が学術用語の定着という点にも及ぶこともありうる、と推測されるからである。

明治の論理学史については既に船山信一による専著がある。本稿

されており、容易に見ることができる。近代デジタルライブラリーの URL については後述。

[15] 『哲学字彙』初版関連の論文においては、語彙の検索のために飛田（1979）が利用されることが多い。ただ、飛田（1979）を利用した場合、初版の訳語を五十音順に検索することは可能であるが、訳語の後接語基や接尾辞だけを捜すなどの特殊な検索はできない。本稿は一字漢語・二字漢語のみが考察対象であるから特殊な検索は必要ではないが、三字以上の漢語を調査する場合にはそうした検索が必要とされることがある。そこで筆者は、より多様な検索が可能である電子テキストを用いることにした。

[16] 船山（1999）序編「明治哲学の系譜」。

[17] 旧文部省による学術用語集は、現在、国立情報学研究所によりインターネット上で無料公開されている。次の URL を参照。
（http://sciterm.nii.ac.jp/cgi-bin/reference.cgi）

では船山の著作を参考とし[18]、さらに論理学者としての活動や影響力を考慮して、明治における主要な論理学者十三人を選んだ。

さらに、その十三人の学者の著作より、次のような基準で調査対象となる著作を選んだ。

ある学者が数種の論理学書を刊行している場合、原則として最も後に刊行された書籍を取り上げた。これは、後に刊行されたものの術語が、訳語として練られたものであると考えたからである。さらに、伝統論理学全般を論じている著作を調査対象とし、また、明治時代に刊行された書籍のみを調査対象とした。

なお、本書で取り上げた調査資料は、読者による検証の便宜を考え、日本国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開されているものを選んでいる[19]。

以下、本稿の資料を年代順に列挙してみれば次の通り。

菊池大麓『論理略説』(明治 15-17 年 (1882-1884))
坪井九馬三『論理学講義訂三版』(明治 21 年 (1888))
千頭清臣『論理学』(明治 26 年 (1893))
清野勉『普通論理学』(明治 27-28 年 (1894-1895))
高山林次郎『論理学』(明治 31 年 (1898))
中島力造『論理学講義』(明治 34 年 (1901))
大西祝『論理学』(全集版、明治 36 年 (1903))
桑木厳翼『論理学及研究法』(渋谷正太郎との共著、明治 36 年 (1903))
北沢定吉『論理学講義』(明治 41 年 (1908))
渡辺又二郎『最新論理学』(明治 41 年 (1908))
服部宇之吉『論理学教科書』(明治 41 年 (1908))
今福忍『最新論理学要義』(明治 41 年 (1908))
紀平正美『最新論理学綱要 増訂三版』(明治 42 年 (1909))

[18] 船山 (1998b) 第一章「明治前期論理学の研究」、および第二章「明治後期論理学の認識論的傾向」。
[19] 国立国会図書館の近代デジタルライブラリーでは、明治期の著作を大量に一般公開している。次の URL を参照。(http://kindai.ndl.go.jp/index.html)

（四）調査対象とする論理学用語の抽出と分類について

調査の対象となる伝統論理学の基本用語の抽出には、近藤他（1964）を参照とした。該書は伝統論理学の分類に沿った論理学書であり、初版以後多くの版を重ねており[20]、その内容には定評があると言ってもよい。調査の手順としては、まず、『論理学概論』を参照として、伝統論理学の基本用語における英語の原語を選定した[21]。続けて、その原語に相当する訳語を文部省（1965）から選び、現代における伝統論理学基本用語の訳語、合計 132 語を確定した。なお基本用語の選択においては、例えば「対当の方形」のような句や、カタカナ表記や固有名詞が入っているものは除外し、漢語のみの用語（一字から八字までの漢語）を抽出している。以下、現代における伝統論理学の基本用語については文部省（1965）の訳語を用いることとし、これを「現代用語」と略称する。

その上で、さらに、上記の明治時代の論理学著作から、現代用語に相当する訳語、総計 1107 語を抽出した。さらに、そこから重なり語を除き、合計 577 語を得た。明治期における論理学用語が現代用語と比べて多いのは、学術用語が定着していない状況を反映している。例えば、「major term」という論理学用語がある場合、現代では「大名辞」という訳語を用いる。他方、明治期においては、「大名辞」と並行して「大語」「統語」「大辞」など複数の訳語が存在している。577 語という数字は、そうした複数の訳語が並行する学界の状況を反映している。

577 語の字数別内訳は次のとおり。

[20] 筆者は 1995 年発行の第 34 版を所有している。
[21] 明治期の論理学著作は、巻末索引や本文中において、術語の英語原語を付載することが多い。英語の原語をまず確定したのは、それを参考にすることにより、現代の用語との比較が容易になるからである。

表一　明治期論理学用語の字数別内訳

一字漢語	二字漢語	三字漢語	四字漢語	五字漢語	六字漢語	七字漢語	その他[22]
13	139	117	136	82	30	21	39

ただし、本稿では、一字漢語と二字漢語のみを考察の対象とする。その理由は次の通りである。『哲学字彙』所収の訳語および哲学基本用語における一字漢語は、先行研究では考察の対象外であった[23]。しかし、表一に示したように明治期には一字漢語の論理学用語が用いられており、かつ、後述するように伝統論理学においては一字漢語の現代用語が存在する以上、考察の必要があると考える。二字漢語については、明治期学術用語に関する先行研究によると、日本語は、「二字漢語の要素が強」く、三字以上の漢語は二字漢語に一字加えたり、あるいは、二字漢語を組み合わせることにより造られるという[24]。つまり、二字漢語は漢語の造語において、語基として重要な役割を果たすと考えられる。そのため、本稿では二字漢語も併せて考察の対象とした。最後に、紙幅の都合により、全ての論理学用語を考察することは不可能であり、考察の対象となる漢語は制限せざるをえない。

さて、前述の作業を通して抽出した明治期論理学著作の一字漢語・二字漢語について、本稿では更に『哲学字彙』初版に関連する用語であるか否かについて調査し、その際、朱京偉に従い、次の 7 タイプに分類した[25]。朱京偉の分類は、『哲学字彙』初版の影響を考える上で有益と考えるからである。分類のタイプは次の通り。

[22] 八字漢語、および「因果の原理」などの句は、「その他」の項目に入れた。
[23] 朱（1997）、朱（2002）においては、その理由が説明されることなく、一字漢語は考察の対象外となっている。
[24] 森岡（1991）PP.355-356。
[25] 朱（2002）第三節第二項「抽出語の整理と分類」を参照。

表二　明治期論理学用語の分類と所属語の性質

	分類の略称	分類の意味	所属語の性質
西周と『哲学字彙』の用語	西周	西周の著述で用いられた訳語	西周に由来する訳語
	西	西周の訳語に基づいた派生語[26]	
	西周／字彙	西周と『哲学字彙』初版共有の語	『哲学字彙』経由で受け継がれた西周の訳語
	西／字	西周と『哲学字彙』初版の訳語に基づいた派生語	
	字彙	『哲学字彙』初版で用いられた訳語	『哲学字彙』に由来する訳語
	字	『哲学字彙』初版の訳語に基づいた派生語	『哲学字彙』に由来する訳語
その他			

なお、表二を見ればわかるように、本稿では初版のみならず、明治初期の学者である西周による訳語と共通するものも、分類対象としている[27]。初版収録の訳語と西周による訳語とは共通するものが多い[28]。したがって、初版の用語について考察する際には、西周の用語をも考慮する必要もある。また、船山信一が指摘しているように、西周は明治における代表的論理学者の一人であり[29]、当時の論理学用語を考える上で西の訳語を調査することは不可欠だからである[30]。

[26] 一般的には、ある語に接頭辞・接尾辞が付いたものを「派生語」と呼ぶが、しかし、本稿では、接頭辞・接尾辞を欠くものを「派生語」に所属させることがある。例えば『哲学字彙』初版に「拡充的」が収録されており、後世の学者が「拡充」という用語を採用する場合、後者を「派生語」と見なした。
[27] 西周の訳語の検索には、高田（2002）PP.296-314 の「西周訳語索引（簡易版）」を用いた。
[28] 森岡（1991）第五章第一節「辞書との関係」、および朱（2002）第四節「哲学辞典にある西周と『字彙』初版の用語」。
[29] 船山（1998b）P.277。
[30] 西周の論理学用語については手島（1999）を参照。

以下、本稿では表二に従って明治論理学の一字漢語・二字漢語を分類調査する。そして、その結果を用いて、『哲学字彙』初版の影響力について考察を行いたい。

三、一字漢語

（一）現代用語の定着率と採用著作数

本稿で抽出した伝統論理学の現代用語のうち、一字漢語は次の 6 語である。

格、式、質、種、量、類

前述のように本稿では、表二に従って、明治論理学の一字漢語をタイプ別に分類した。本項目では、各タイプにおける上記の基本用語の定着率に注目し、現代用語への初版の影響力について考える。ここで所謂「定着率」とは、各タイプの総計語数における現代用語の割合を指す。

また、本項目ではある訳語が何種類の著作に採用されたのか、という点についても調査を行なった。多くの著作が採用している訳語は明治において普及していた重要語である、と考えられるからである。このような調査も、初版の影響力を考える手掛かりとなりうる。

調査の結果を示すのが表三である。表三には一字漢語のタイプが分類してあるとともに、また、それが何種類の著作に採用されたか、という結果も示してある[31]。なお、網掛けしてある訳語は、現代用語と共通しているものである。

[31] ある用語が何種類の著作に採用されているのか、という観点からの表作成は朱（2002）に倣ったものである。

表三　一字漢語の所属タイプと採用著作数

採用著作数	字彙	西周／字彙	西周	その他
8 種		種、類	式[32]、量	
7 種				格、質、
1 種	法		性	語、主、属、堆、賓
合計	1	2	3	7

表三によれば、明治期の主要論理学者が用いた一字漢語は計 13 語。また、現在の伝統論理学における一字漢語、計 6 語は、明治期に全て出現していたことがわかる。

朱京偉によると、明治期から昭和までの哲学用語辞典所収の哲学基本用語を「字彙」などの各タイプに分類すると、とりわけ多いのは「字彙」「西周／字彙」タイプであるという[33]。これは哲学基本用語成立における『哲学字彙』初版と西周の用語の影響力の大きさを示している。朱の指摘を表三により検証してみると、各タイプのうち、現代用語への定着率が最も高いのが「西周／字彙」タイプであり、100 パーセント（二語中二語が現代用語と一致している）。この結果は、氏の所論どおり、このタイプの明治から現在までの影響力の大きさを示すものと考えられる。次いで、「西周」（約 66 パーセント）、「その他」（約 28 パーセント）となる。

意外なことに、「字彙」タイプには現代用語は一語もなく、最も影響力が無い。これは、論理学用語における一字漢語という領域では「字彙」タイプの影響力が及ばなかったことを示す、と推察される。

---

[32] この訳語については注意すべき点がある。現代用語では「式」という一字漢語は、「mood」の訳語である。しかし西周の「式」の原語は、「formula」であり、西自身は、「mood」を「軌」と訳しているのである。実際に「mood」の訳語に「式」を初めて用いたのは、今回調査した著作の中という限定付きで、清野勉である。これについては次項の表を参照。なお、「式」のように、ある訳語が異なる原語の訳語に借用されるという例は、初版に関連する二字漢語にもよく見られる。次節の第二項「明治期主要論理学者の訳語採用状況」を参照。

[33] 朱（2002）第四節第一項「辞典時期別から見た西周と初版の用語の特徴」。

なお、表において 7 種、8 種の著作が採用している用語は、明治の論理学における重要語であり、かつ定着していた訳語であると考えられる。注目されるのは、これらの重要語が現代用語と共通するということである。このことは、多くの主要論理学者が採用する用語と現代用語との密接な関係を暗示している。これについては、さらに次節において論及する。

（二）明治期主要論理学者の訳語採用状況

続いて、主要論理学者が前掲の現代用語（一字漢語）全 6 語の原語をどのように訳しているのか、という点についてタイプ別に見てみたい。このような調査を通じて、明治における初版の影響の実態や、主要論理学者がいつ頃から現代用語と共通する訳語を採用し始めたのかがわかる。

調査の結果を示すのが次の表四および五である。表四は初版関連タイプの現代用語の原語についてであり、表五は初版と無関係のタイプの原語について取り上げている。

表の最上段は、現代用語とその原語を示す。最左列は、調査した著作を作者名を用いて示している。作者名は上から著作年代順に並べた。作者名や著作年代については、前節第三項「調査対象とする学者」を参照されたい。

欄内の斜め線は原語に相当する訳語が著作中に無いことを表す。また、欄内におけるゴシックで示されている訳語は「字彙」「字」「西周/字彙」「西／字」などの初版関連のタイプの語彙であることを示す。なお、比較対象の便宜のために、初版の訳語も載せた。最左列の上から二番目にある「初版」という項目の横列がそれである。

表四　初版関連タイプ（「西周/字彙」34）各著作訳語表

	類 genus	種 species
初版	**類**	**種**
菊池	**類**	**種**
坪井		
千頭		
清野	**類**	**種**
大西		
高山		
中島	**類**	**種**
桑木	**類**	**種**
今福	**類**	**種**
北沢	類概念	**種**
渡辺	**類**	**種**
服部	**類**	属
紀平	**類**	**種**

表五　初版と無関係のタイプ（「西周」「その他」）各著作訳語表

	格 mood	式 figure	量 quantity	質 quality
初版	**図式**	**様式**	**分量**	**形質**
菊池	**形象**	様法	量	質
坪井			量	質
千頭			**分量**	**性質**[35]
清野	式	格	**分量**	**性質**

[34] 表三を見ればわかるように、字彙タイプの列には現代用語と同じ訳語は存在しない。そのため、この表四では「西周/字彙」タイプのみが対象となっている。

[35] 初版では character の訳語。

大西	式	格	量	質
高山	式	格	量	質
中島	式	格	**分量**	**性質**
桑木	式	格	量	質
今福	式	格	量	質
北沢	式	格	**分量**	**性質**
渡辺	**論體**	**図式**	**分量**	**性質**
服部	作法	**法**	量	性
紀平	論式	**図式**	量	質

表四および五を見ればわかるように、現在の一字漢語は明治の前半、菊池大麓から清野勉の著作までで全て出揃っている。伝統論理学基本用語の一字漢語は、明治の早い時期に確定したと考えられる。

次に各タイプ別に特色をみていこう。

表四は、「西周／字彙」タイプの現代用語の原語がどのように訳されていたのか、という点についての表である。このタイプの特色としては、早くから訳語が主要学者間に定着し、異訳が非常に少ないこと、また、そのように定着した訳語が現在でも使用されていること、などが挙げられる。そうした特色については、さらに次節「二字漢語」で検討する。

表五は、「西周」「その他」タイプなど、『哲学字彙』初版の用語と無関係のタイプについての表である。このタイプの原語の訳語においては、初版の訳語の影響力は小さく、初版と無関係の「質」「量」「格」「式」などが早い時期に定着している。これは、初版以外の論理学用語における権威の存在を暗示していると思われる。

明治期論理学用語における初版以外の権威として注目されるのは、西周・菊池大麓・清野勉・大西祝である。西の訳語の明治期における影響力については先行研究があるため[36]、ここでは、訳語方面の

[36] 明治期における西周の訳語の影響については、従来、辞書を中心に考察されている。栗原（1966）、森岡（1991）第五章「西周の訳語」、朱（2002）手島

貢献で取り上げられることがほぼ皆無の、菊池以下の三人について述べることとする。

菊池大麓は、現代用語と同じ「類」「種」「質」「量」を、早くから用いている。特に論理学における「質」「量」という訳語に関しては、菊池は最も早期の使用者の一人であろう。

菊池の『論理略説』は日本で最も早期に出版された論理学書の一つである。船山信一によれば、『論理略説』の前に出た論理学専門書は、西周の『格致啓蒙』（明治 7 年）など四種あるに過ぎない[37]。『論理略説』は、明治初期の術語解説辞典である普及舎（1885）や坪井（1883）の「題言」において、論理学の参考文献の一つとしてあげられており[38]、論理学著作として明治初期に一定の影響力を有したとみられる。

表五によると、『哲学字彙』初版と無関係のタイプに属する「格」「式」の二語は、清野勉に始まり、大西祝以下の学者に踏襲された。船山信一によれば、清野勉と大西祝は西周とならぶ明治前期論理学を代表する学者である[39]。

朱京偉は、明治の論理学著作における初出語の調査結果を発表している[40]。その内、清野勉の著作 4 種（『帰納法論理学』『帰納演繹論理学』『普通論理学』）における初出語は合計 31 語である。この数字は他の論理学者に比べて多く、清野の論理学用語成立における貢献を示していると考えられる。

清野勉の論理学用語は初版と共通するものも多く、その訳語は明らかに初版の影響を受けている。しかし、「格」「式」のように異なる用語も採用している。これは、清野が哲学用語の翻訳において安易に先学の用語を踏襲せず、慎重であったことと関係していると思われる[41]。

（2002）などを参照。

37 船山（1998b）巻末附録「明治に出た論理学文献」を参照。

38 千頭（1885）「緒言」においても菊池の名前は言及されている。

39 船山（1998b）P.277。

40 朱（2005）P P.86-87。

41 清野の哲学用語についての見解については、清野（1888）を参照。なお、こ

訳語の影響力という点では、大西祝も注目される。

大西祝の『論理学』[42]は出版後、新聞にも書評が載り、当時注目された著作であった[43]。また、本稿において調査対象とした学者の一人である高山林次郎は、「妥当にして特に解し易きもの」[44]として、特に井上哲次郎と大西祝の用語を多く採用したと述べている。当時においては、大西の用語は平易なものであり、井上哲次郎の訳語と併称されるほど有名なものであったことが窺われる。大西祝の著作『論理学』について、船山信一は、「大正に至るまで権威的な著作であった」[45]という。それゆえ、彼の採用した訳語は、学術史上における重要学者の訳語というのに止まらず、特に影響力をもったものと考えられる。

興味深いのは、大西の訳語の一部が清野勉による訳語と共通していることである。例えば、清野の『普通論理学』と大西の全集版『論理学』の訳語を比較すると、「主語」「客語」「対当」などが共通している。こうした共通点は、大西が学生時代に雑誌『哲学会雑誌』の活動に関与していたことと関係すると思われる。先述の哲学用語翻訳に関する論文を清野が『哲学会雑誌』に載せたのは明治 21 年のことである。また、清野は明治 22 年から 25 年にかけて数編の論理学論文を同誌で発表している[46]。大西は明治 20 年の同誌刊行時には哲学会の会員であり、21 年度には同会の書記を務め、22 年、23 年には『哲学会雑誌』の編集委員を務めている[47]。雑誌の編纂に大きく関わっていた大西が清野の論文を読んでいた可能性は、非常に高い。

大西が清野の訳語の影響を受けているのであれば、大西の採用した「格」「式」という訳語も清野を踏襲したと考えるのが自然である。また、大西が踏襲した清野の用語を、さらに高山以降の学者が権威

の論文については、柴田（2003）P.298 が要点を論じており参考となる。

42 『大西博士全集』所収の『論理学』のこと。本稿が調査した論理学書の一つ。

43 全集版『論理学』（三版）の巻末には全集の広告があり、そこに毎日新聞・万朝報など、当時の一般紙に掲載された該書の書評が抜萃されている。

44 『論理学』序言。

45 船山（1998a）P.146。

46 清野（1889）、同（1891a）同（1891b）、同（1892）。

47 平山（1989）P.98。

あるものとして踏襲したものと考えられる。

以上のように、初版以外にも、訳語に影響力を有した学者がいたことを、明治の学術語彙史においては考慮する必要がある。「類」「種」などの西周・初版の用語は、菊池・清野に採用されているが、菊池等を通じて訳語が更に普及したということもあったと思われる。

四、二字漢語

（一）現代用語の定着率と採用著作数

本稿が抽出した現代用語における二字漢語は、次の 38 語である。

意味、演繹、外延、概念、換位、還元、換質、帰結、帰納、逆換、虚偽、区分、繋辞、結論、後件、捨象、周延、集合、主語、主辞、述語、推理、推論、前件、前提、対当、妥当、抽象、定義、内包、判断、分類、変格、名辞、命題、類推、類別、連辞

以下、各タイプにおける現代への定着率をみてみよう。表の体裁は前節第一項と同様である。

表六　初版関連タイプ

著作数	字彙	字	西周／字彙	西／字
11 種			外延、命題	
10 種	前提、名辞		内包	
9 種			概念、定義	
7 種	断定、連辞[48]			
5 種	後件、後項、推論、	拡充	性質、分量	
4 種	換位、前項			
3 種	矛盾	分釈	彙類、主位、抽象、転換	

[48] 「聯辞」と表記されることもある。

2 種	帰結、虚偽、区分、図式、背反、比論、賓位、		渾體[49]、差等、否定	重體、反対
1 種	乖戻、含蓄、形象、作法、充実、推断、相関、相対、廃式、批判、用式	推測、推度、離接、論體	化成、還元、観念、肯定、断言	
合計	28	6	19	2

表七　初版と無関係のタイプ

著作数	西周	その他
7 種		主辞、断案
6 種		対当、賓辞
5 種		推理、前件
4 種	分類	繋辞、誤謬、判断
3 種		意味、換質、後立、主部、小語、小辞、前立、大語、大辞、媒語、媒辞、謬論、賓部、論式
2 種		客語、繋部、結論、合法、釈義、周延、周到、周布、主語、提案、判定、部類
1 種	結辞、決定	下位、改造、確実、仮想、客位、局称、偽論、繋素、決論、語辞、指示、周衍、従語、従属、周逮、述意、上存、上位、推縯、正定、正当、接辞、先件、先項、属辞、中語、中辞、直説、提綱、同義、統語、等類、内容、駁體、敷衍、副案、普称、部属、分科、変格、変式、変質、包容、鏈體、論堆、様法
合計	3	81

[49] 「渾体」と表記されることもある。

表六および七により、現代用語 38 語のうち、29 語が明治期に出現していることがわかる。

さて、最も定着率が高いのは、表六の「西周／字彙」タイプであり、19 語中 7 語が現代用語と合致している（約 36 パーセント）。次いで、「西周」（表七、約 33 パーセント）、「字彙」（表六、約 32 パーセント）、「その他」（表七、約 14 パーセント）と続く。一字漢語同様、「西周／字彙」タイプの定着率が最も高く、このタイプの影響力の強さが確認できる。

表六および七において注目されるのは、上位に位置する用語ほど、現代用語と共通するものが多くなることである。換言すれば、多くの学者に採用される訳語ほど現代用語として定着しやすいのである。具体的にいえば、例えば、最も多くの著作に採用された訳語は、全て現代用語として定着する。二字漢語中、最も多くの著作に採用された訳語は、11 種類の著作に用いられている「外延」「命題」である。この二語は現代用語と共通する。表六および七において、5 種類以上の著作に採用されている用語は全部で 21 語。その内 14 語が現在でも使用されており、その定着率は約 66 パーセントである。他方、2 種類から 4 種類の著作に採用されている用語は全部で 50 語、その内 14 語が現在でも使用されており、その定着率は 28 パーセント。1 種類の著作にのみ採用されている用語は全部で 68 語、その内に現在用いられているのは 3 語に過ぎず、その定着率は約 4 パーセントである。明治の主要学者によく用いられた訳語は定着しやすく、現代用語に強い影響力を有していることがわかる。なお、このような傾向は一字漢語においても同様であり、表三を参照されたい[50]。

また、このような傾向は、主要学者の用いる訳語と学術用語の定着とに関連性があることを示している。これは、一般的に学術史上の重要学者が往往にして後世に影響力を有することを想起すれば、

[50] 多くの著作に採用された訳語は現代用語として定着しやすい、という傾向は、実は一字漢語・二字漢語だけに限らない。筆者の調査によれば、六字漢語まで同様の傾向が確認できる。

意外ではない。

（二）明治期主要論理学者の訳語採用状況

続いて、主要論理学者が現代用語の原語をどのように訳しているのか、という点について検討してみよう。なお、ここで取り上げる現代用語は、表六および七に見える計 29 語だけである。

まず表六における「字彙」タイプ中の現代用語の原語について考察する。表の体裁は前節第二項と同様である。

表八　「字彙」タイプ　各著作訳語表（その１）

	名辞 term	前提 Premise	連辞 聯辞 Copula	後件 Consequent	推論 推理 Inference	換位 Conversion
初版	**名辞**	**前提**	**連辞**	**後項**	**推度法**	**転換**
菊池	**名辞**	**前提**	**連辞**	**後項**	**推断**[51]	**転換**
坪井	語辞	提案	接辞	**後項**	推縯	**転換**
千頭	**名辞**	**前命題**	**連辞**	**後項**	**推度法**	**転換法**
清野	語	**前提**	**連辞**	**後項**	推理・敷衍	**転換法**
大西	**名辞**	**前提**	繋辞	後立	**推論**[52]	**転換・換位**
高山	**名辞**	**前提**		後立	**推論**	**換位**
中島	**名辞**	**前提**	**連辞**	**後件**	**推論**	**換位法**
桑木	**名辞**	**前提**	繋辞・繋部	後立	**推論**・推理	**換位**
今福	**名辞**	**前提**	**連辞**・繋辞・繋素	**後件**	推理	**換位法**

[51] 「推断」は初版では、「ratiocination」の訳語。なお、菊池は実際には「reasoning」の訳語として「推断」を用いている（『論理略説』巻 1.7）。しかし、「推断」以外に『論理略説』には推理・推論の概念を表す訳語が無いため、ここでは「推断」を、推論等の概念を表すものとして挙げておく。

[52] 「推論」は初版では、「reasoning」の訳語。

北沢	**名辞**		繫辞・繫部	**後件**	**推度**	**換位**
渡辺	**名辞**	**前提**	結辞	**後件**	**推論**	転位法
服部		**前提**	**聯辞**	**後項**	**推測**[53]	**転換法**
紀平	**名辞**	**前提**	**連辞**	**後件**	推理	**換位法**

表九　「字彙」タイプ　各著作訳語表（その２）

	区分 division	帰結 consequence	虚偽 fallacy
初版	**区分・分釈法**	**後件**	**虚偽**
菊池			誤謬
坪井			
千頭	**区分法・分釈法**	決定・決定命題	誤謬
清野	**分釈**		偽論・**虚偽**
大西			似而非推論
高山			誤謬
中島			
桑木	分科		謬論
今福	分類	**帰結**[54]	謬論
北沢	**分釈**		謬論・似而非三段論法
渡辺	**区分**		誤謬
服部	分類法		
紀平	**区分・分釈**	**帰結**	**虚偽**・誤謬推理

ゴシック体の用語に注目すればわかるように、このタイプにおいては、『哲学字彙』初版関連の用語が同時代の学者に多く採用されている。特に、「名辞 term」「前提 premise」は、菊池から紀平までほ

[53] 初版には、「syllogism」の訳語として「推測式」を載せる。
[54] 初版では、「conclusion」の訳語。

とんどの著作が採用しており、訳語として早くから定着してたことがわかる。しかし、そのように最初から定着している訳語は非常に少なく、逆に訳語が安定していないものの方が多く見られる。

例えば、「推論・推理 Inference」「区分 division」「虚偽 fallacy」などは訳語が安定しておらず、複数の訳語が並立している。

また、途中から異なる訳語の採用が多く見られる原語もある。「連辞 copula」は、早くから「連辞」が採用されているが、大西祝が「繋辞」という訳語を使用してから、大西に倣う学者も出現するようになり、結果として大西の用語も現在まで伝わっている。

大西の用語の影響は「換位 conversion」という訳語にも表れている。表八では「換位」は「字彙」タイプであるが、『哲学字彙』初版では実は原語を「転換」と訳している。初版において「換位」と訳されているのは、実は「transposition」である。このことは『哲学字彙』初版の訳語を借用して、別に誰かが「conversion」を訳したことを示している。そこで表八をみると、本稿で調査した主要論理学者の中で最初に「conversion」を「換位」と訳したのは、大西であることがわかる。大西が「換位」と訳するまでは、初版の訳語である「転換」を用いる学者が多い。大西自身も「転換」を併用しており、「Conversion」の訳語については、大西の翻訳が転換点であったことが窺われる。

また、「転換」「換位」の例のように、明治初期に多く採用されていた初版の訳語が、ある時期を境に使用されなくなり、別の初版の訳語が用いられるようになることがある。表八では「後件 consequent」の項目にそのような現象が見られる。菊池から清野までの学者は初版の訳語「後項 consequent」を使用していたが、中島から「後件」が多用されるようになるのである。なお、初版では、「後件」は実は「consequence」の訳語である。

以上のように、「字彙」タイプの基本用語の原語は、訳語が早期から一つに確定するものが少なく、複数の訳語が通行する傾向がある。

続いて、西周／字彙タイプの重要語の表をみてみよう。

表十　「西周／字彙」タイプ　各著作訳語表

	外延 Denotation Extension	命題 Proposition	内包 Intension Connotation	概念 Concept	定義 Definition	抽象 Abstraction	還元 Reduction
初版	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**	**抽象力**	**還元法**
菊池	**外延**	述意	**内包**				**化成**[55]
坪井		**命題**			釈義		
千頭		**命題**			**定義**		
清野	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**		還原法
大西	**外延**	**命題**	**内包**	**観念**			改格法
高山	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**			
中島	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**		変格
桑木	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**		改格法
今福	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**		
北沢	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**	**抽象**	**還元**
渡辺	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**	**抽象**	改造
服部	**外延**		内容	**概念**	**定義**		復造法
紀平	**外延**	**命題**	**内包**	**概念**	**定義**	**抽象**	**還元法**

このタイプで特徴的なのは、訳語が早くから主要学者に採用され、定着しているものが多いことである。さらに、定着した訳語はそのまま現在まで用いられており、このことは、このタイプの訳語が特に大きな影響力を有していたことを示している。同様の傾向は前節で論及した一字漢語においても見られる。

また、このことは、西周の論理学用語の普及に、『哲学字彙』初版が大きな役割を果たしたことを示している。従来、西周の用語が『哲

[55] 初版では、「transformation」の訳語。

学字彙』を通して一般化したと指摘されてきた[56]。しかし、哲学のどの分野に何時頃から定着したのか、などについての具体的な論及は皆無であった。本稿の調査によれば、西周の論理学用語の一字漢語・二字漢語が明治早期から定着したことに、『哲学字彙』初版は大きな役割を果たしたと言える。

続いて、初版の中で「西周／字彙」タイプの論理学用語がなぜ明治において特に早くから普及したのか、という点について考えみよう。これについては、上の表の「外延」「命題」「内包」「概念」「定義」「還元」が西周『致知啓蒙』にみえる訳語であることが注目される[57]。

西周の手になる日本最初の論理学書『致知啓蒙』は明治 7 年（1874）に出版された。ただ該書は初版時には注目されなかったが、明治 14 年（1881）に東京師範学校の生徒の要望により数百部が再版され、その存在が漸く知られるようになったという[58]。また、森岡健二によると、「明治初期の専門語の翻訳には慎重な態度が取られ、個人が勝手にその場の思いつきで翻訳してもほとんど問題にされ」ず、先学の訳語から適当なものを捜すことが翻訳の手順の一つであったという[59]。これらのことを考え合わせると、「西周／字彙」タイプの訳語が早くから定着したのは、『哲学字彙』初版出版時期（明治 14 年）が西周の論理学が評価され始める時期と重なり、西周の訳語がある程度知られていたことも理由の一つであろう。別な角度から言えば、初版の一部の論理学用語は、西周の訳語を採用したからこそ影響力をもち得たとも言える。

---

[56] 例えば、朱京偉（2002）第四節第一項「辞典時期別から見た初版の用語の特徴」。

[57] 西周（1874）巻 1.25、巻 1.17、巻 1.25、巻 1.11、巻 1.11、巻 2.26 を参照。なお、表三における「西周／字彙」タイプの一字漢語「種」「類」も『致知啓蒙』に見える訳語である。西周（1874）巻 1.22 を参照。なお、初版と重複する『致知啓蒙』の訳語全てが現在に定着しているわけではない。例えば、表六「西周/字彙」タイプの「主位」「彙類」は西周（1874）巻 1.18、巻 1.20 に見えるが現代用語ではない。

[58] 手島（1999）の指摘による。なお、手島の指摘は、麻生義輝編『西周哲学著作集』「解説」P.385（岩波書店、1933）を参照としている。

[59] 森岡（1991）PP.421-422。

最後に初版と無関係のタイプ(「西周」「その他」)を見てみよう[60]。

表十一　初版と無関係のタイプ　各著作訳語表（その１）

	分類 Classifica- tion	主辞 主語 Subject	対当 Opposition	前件 Antecede- nt	判断 Judgment
初版	**彙類法**	**主位**	**反対法**	**前項**	**断定**
菊池	**彙類**	主辞		**前項**	批判
坪井		**主位**	命題相関	**前項**	
千頭		主辞		**前項**	
清野		主語・**主位**	対当法	先項	**断定**
大西		主語	対当	前立	判定・**断定**
高山		主辞	対当	前立	判定
中島	分類	主辞	対当法	前件	**断定**
桑木	**彙類**	主部	対当	前立	判断
今福	**彙類**	主辞・主部	対当	前件	**断定**
北沢	分類	主・主部	対当	前件	判断
渡辺		主辞	対当	前件・先件	判断
服部		主辞	**相関**[61]	**前項**	**断定**
紀平	分類	**主位**	対当関係	前件	判断

[60] 「その他」タイプの「推理[0]reference」「繋辞 copula」「変格 reduction」の 3 語は、それぞれ既に検討した「推論」「連辞」「還元」の異訳に相当する。すなわち、「推理」等の 3 語の原語に対する主要学者の訳語は、既に検討したものと同じである。よって、以下の表では省略する。

[61] 初版では、「peciprocity」の訳語。

表十二　初版と無関係のタイプ　各著作訳語表（その２）

	換質 Obversion	意味 Meaning	周延 Distribution	結論 Conclusion
初版		**義理・旨趣**	**広衍**	**断言・帰結・結末・機緘**
菊池			周逮	**断言**
坪井	反定推縯		周布	断案
千頭	表裏法		**充実**[62]	決定名辞
清野		意味	周到	断案
大西	換質	意味	**拡充**[63]	断案
高山	換質		**拡充**	断案・**断定**[64]
中島	換質法	意味	周延	結論・断案
桑木	換質		**拡充**	断案
今福	換質法		周布・**拡充**	断案
北沢	変質		**拡充**	
渡辺	変性法		周到	**断定**
服部	反定法		周衍	決論
紀平			周延	結論

このタイプの訳語には、既にみた「名辞」「命題」のように早くから定着した、現代用語と共通する訳語は見当たらない。比較的早期に定着したのは清野に始まり大西が踏襲した「対当」という用語であるが、これも用例が確認されるのは明治 20 年代中頃である[65]。

逆に多く見られるのは、『哲学字彙』初版の用語以外に複数の訳語が並行して使用され、訳語が固定化していないケースであり、この点では前述の「字彙」タイプと同様の傾向を有する。

[62] 初版では、「plenum」の訳語。
[63] 初版には、「ampliative」の訳語として、「充実的」を載せる。
[64] 初版では、「judgment」の訳語。
[65] 論理学における「対当」という訳語の最初出の例は、管見の限りでは、清野（1891a）である。なお、1891 年は明治 24 年に当たる。

五、おわりに

以上、本稿では、『哲学字彙』初版の影響力について、明治期主要論理学者の著作を資料とし、伝統論理学の一字漢語・二字漢語を中心に考察した。

初版の影響を考える上で特に注目されるのは、明治初期の学者である西周の訳語と重複しているタイプのものである。

先行研究は、初版の一部の訳語が西周の訳語を共通していることが指摘している。そうした訳語は近代哲学用語成立において特に影響力を有していたと見られる。明治期の伝統論理学の訳語もそうした影響力を反映しており、主要学者の使用する初版の訳語のうち、西周の訳語と重複するものは、特に現代への定着率が高い。

本稿ではまた、現代用語の原語に注目し、それらが明治の主要論理学者にどのように翻訳されているのか、という点について調査した。調査の結果、西周のものと共通する初版の訳語は、明治期において際立った影響力を有していたことがわかった。このタイプの訳語は、明治の早期から主要学者の多くに採用されて定着し、そのまま現在まで使用される傾向がある。他方、西周のものと共通しない初版の訳語や、初版と無関係の訳語の場合、明治期において早期に定着せず、複数の訳語が並行する傾向が見られる。

なお、一字漢語・二字漢語に関して言えば、主要論理学者の多くが採用する用語がそのまま現在まで定着する、という傾向が見られる。換言すれば、主要論理学者たちの動向が現在にまで影響を与えていると考えられる。明治の主要論理学者の中で、特に注目されるのは大西祝である。従来指摘されていないことであるが、明治中期の哲学者大西祝の用語は、以後の論理学用語に一定の影響力を有したものと思われる。

本稿は一字漢語・二字漢語を中心としており、三字以上の論理学用語については考察していない。これらについては、別稿で論じる予定である。

参考文献

清野勉（1888）「哲学字彙編纂ノコトヲ論ジ併セテ世ノ言語改良家ニ告グ」『哲学会雑誌』第 16 号 PP.200-210、第 17 号 PP.273-291、第 18 号 PP.332-353、第 19 号 PP.395-411、哲学会

清野勉（1889）「演繹的方法ノ質」『哲学会雑誌』第 31 号 PP.371-389、第 32 号 PP.446-464、第 33 号 PP.506-527、哲学会

清野勉（1891a）「思想三大理法ノ適用」『哲学会雑誌』第 55 号 PP.1030-1044、第 56 号 PP.1193-1215、哲学会

清野勉（1891b）「論理ノ格ニツキテ」『哲学会雑誌』第 58 号 PP.1331-1343、哲学会

清野勉（1892）「演繹法論理ノ応用」『哲学会雑誌』第 69 号 PP.422-430、第 70 号 PP.501-506、哲学会

栗原紀子（1966）「訳語の研究 ——西周を中心に——」[66]、『日本文学』27 PP.69-87、東京女子大学学会日本文学部会

近藤洋逸・好並英司（1964）『論理学概論』、岩波書店

作者不詳（1888）「哲学字彙の編纂」『哲学会雑誌』第 24 号 PP.115-117、哲学会

柴田隆行（2003）「日本の哲学思想史と翻訳語」、石塚正英・柴田隆行編『哲学・思想翻訳語辞典』に収録 PP.296-301、論創社

朱京偉（1997）「『哲学字彙』初版の訳語とその性質」[67]『名古屋商科大学論集』41 巻 2 号 PP.43-68、名古屋商科大学商学会

朱京偉（2002）「明治期における近代哲学用語の成立——哲学辞典類による検証——」『日本語科学』12 PP.96-127、国立国語研究所

朱京偉（2005）「明治初期以降の哲学と論理学の新出語」『日本語科学』18 PP.71-93、国立国語研究所

[66] この論文は、国立情報学研究所の論文情報ナビゲータである CiNii において無料公開されている。次の URL を参照。（http://ci.nii.ac.jp/naid/110007185109）

[67] この論文は後に朱京偉『近代日中新語の創出と交流——人文科学と自然科学の専門語を中心に』（東京：白帝社、2003 年）に収録された。次の朱京偉（2002）も同様。

高田真子（2002）「『哲学字彙』の学術漢語について」『近代日本語における学術用語の成立と定着』絢文社

千頭清臣（1885）『論理指鍼』[68]敬業社

坪井九馬三（1883）『論理学講義』酒井清三他

手島邦夫（1999）「西周『致知啓蒙の訳語』――その形成過程と出自について――」『文芸研究』第 147 集 PP.48-58、日本文芸研究会

手島邦夫（2002）「西周の訳語の定着――『哲学字彙』から明治中期の英和辞書と中後期の国語辞書へ――」『文芸研究』第 154 集 PP.25-38、日本文芸研究会

永嶋大典（1996）『蘭和・英和辞書発達史』復刻版、ゆまに書房、初版は 1970 年、講談社

西周（1874）『致知啓蒙』瑞穂屋卯三郎

飛田良文（1979）『哲学字彙訳語総索引』笠間書院

飛田良文・琴屋清香（2005）『改訂増補哲学字彙索引』港の人

平山洋（1989）『大西祝とその時代』日本図書センター

普及舎（1885）『教育、心理、論理 術語詳解』普及舎

船山信一（1998a）『日本の観念論者』、『船山信一著作集』第八巻に収録、こぶし書房、初出は 1956 年、英宝社

船山信一（1998b）『明治論理学史研究』、『船山信一著作集』第八巻に収録、こぶし書房、初出は 1966 年、理想社

船山信一（1999）『明治哲学史研究』、『船山信一著作集』第六巻に収録、こぶし書房、初出は 1959 年、ミネルヴァ書房

森岡健二編（1991）『近代語の成立 語彙編』改訂版、明治書院

森岡健二（2007）「哲学字彙」、飛田良文他編『日本語学研究辞典』に収録、P.1082、明治書院

文部省（1965）『学術用語集 論理学編』、大日本株式会社

[68] 本書は、国会図書館近代デジタルライブラリーで公開されている。以下、坪井（1883）、西（1984）、普及舎（1885）も同様。